パラアーチェリー・大塚忠胤（ただつぐ）選手（日本アムウェイ）に聞く

見据える〝標的〟は、いつも前に。

近年、ますますの注目を集めているパラスポーツ。パラアーチェリーの大塚忠胤選手は国内外で屈指の実力派として知られ、今後いっそうの飛躍が期待されるトップアスリートだ。競技とパラスポーツへの思いをうかがった。

いつも前向きで、妥協しないアスリート

「一つのことを追求する性格なんです」

18歳の時バイク事故に遭い右腕の自由を失った大塚選手が、アーチェリーを始めたのは37歳のときだった。先輩の誘いでフィールドアーチェリー（ゴルフのように自然の中を歩きながら的を狙う競技）を見学に訪ねたところ、元来山歩きが好きだったこともあって、すぐにのめり込んだと話す。

支えとなったのは当時の用具メーカーのカタログにも出演していた、米国のジェフ・ファブリー選手の存在。右手と右足を失いながら、健常者に交じっても上位を争うほどの名手だ。

「似た境遇でプロ活動している選手はあこがれで、励みでもありました」

情報が少ない時代、大塚選手は「ファブリー選手がどう射ているか知りたい」と訪米し、世界最大規模のアーチェリーの祭典・ベガスシュートオープンで面会をかなえる。そして同大会に毎年出場するなかで、パラアーチェリー競技の存在を知り、世界を目指す転機をも得たのだった。

パラアーチェリー競技で頭角を現した大塚選手は国内外の大会で経験を重ね、今や世界大会の優勝経験まである。しかしこれまでの結果には「満足できない」という。

集大成として目指していた2016年の世界有数の大会は、スコア集計のミスで出場を逃した。当初は落ち込んだものの、今は「お世話になったアーチェリー場のオーナー、アスリート活動に共感してくれた方々……。次にしっかりと結果を残して、会いに行きたい人がたくさんいます」と、切り替えた笑顔で話す。

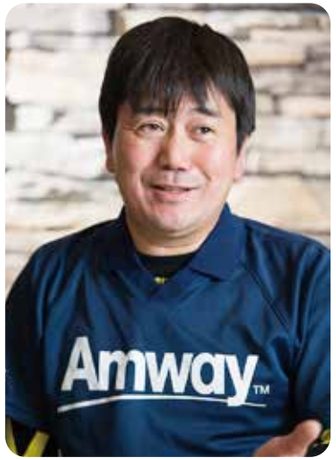
「モットーは『面白きこともなき世を面白く』。苦しい時も笑顔でいたほうが何事もうまくいきます」と話す大塚選手。今後に向け日々の研さんを重ねている。

日本中に〝希望の矢〟を

今後のパラスポーツ発展に向け、競技環境もいっそう重要だ。「大きな大会では車いすの選手も多く、移動経路や宿舎、トイレの確保がいつも課題です。また個人的にも海外遠征の費用や職場の理解に苦労した時期もあります」

そんな大塚選手はアスリートの支援制度を利用して、今年10月から日本アムウェイに入社。「成功を望む全ての人々にその機会を提供したい」との理念にも共鳴。競技に取り組むうえで大きな支えを得た。

「皆が笑顔で働いている職場で、私自身も競技にいっそう前向きに取り組める環境です。これまで以上に結果を残し、恩返しをしていきたいですね」と、前向きな笑顔で進み続ける大塚選手。日本中に〝希望の矢〟を放つかのような、活躍の姿をみせてくれそうだ。



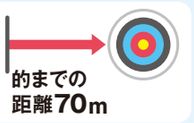
大塚 忠胤選手

おおつか・ただつぐ　栃木県足利市出身、1968年生まれ。18歳でバイク事故に遭い右上肢機能が全廃。その後フィールドアーチェリーと出会ったのをきっかけに競技生活へ。犬歯で弓を引く独特のスタイルを貫き、限りない可能性に挑戦し続けている。

パラアーチェリーの種目とルール

リカーブ オープン

滑車がつかない弓（リカーブボウ）を使う種目。足腰の障害で上半身に制限のない選手が多い。直径122cmの標的を70mの距離から狙い、合計点を競う。

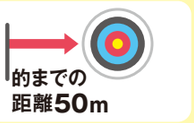


弓の種類　リカーブボウ

コンパウンド オープン

大塚選手が参加

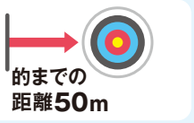
滑車付きで、リカーブの半分ほどの力で引ける弓（コンパウンドボウ）を使う種目。手の運動機能に制限がある選手の参加も多い。直径80cmの標的を50mの距離から狙い、合計点を競う。



弓の種類　コンパウンドボウ

W1 オープン

四肢の障害により車いすを使用する選手が競い、自分で矢をセットできない選手はアシスタントの補助が認められる。直径80cmの標的を50mの距離から狙い、合計点を競う。



弓の種類　リカーブボウ／コンパウンドボウ

広告　企画・制作 毎日新聞社広告局　日本アムウェイ合同会社　http://www.amway.co.jp/